

## 第3回県立高等学校入学者選抜調査改善委員会

### 議 事 録

- 1 日 時 平成 28 年 4 月 28 日 (木)  
午後 3 時 00 分～ 4 時 45 分
- 2 場 所 神奈川県庁 新庁舎 第 5 B 会議室
- 3 出席委員等 田中 統治 種田 保穂 林 巧樹  
遊部 裕司 松本 一彦 佐藤 均  
稲田 義郎 九石 美智穂 土佐 明美  
折笠 初雄 (敬称略)

(事務局)

定刻少し前ですけれども、ただ今から第3回県立高等学校入学者選抜調査改善委員会を始めさせていただきます。早速ですが、県立高等学校入学者選抜調査改善委員会設置及び運営に関する要綱第7条第1項に委員長が座長となる、とありますので、進行は田中委員長お願いいたします。

委員長（田中委員）

それでは、始めます。まず、神奈川県PTA協議会ですが、笹原会長がご欠席でございますので、遊部専務理事に代理出席いただいております。

それでは、議題に入る前に、「会議公開の可否について」でございます。

本日は、引き続き、調査結果及び再発防止策の検討等が協議題となっておりますので、調査の関係上、個人情報扱う場合や入学者選抜の特殊事情に係るなどやむを得ない場合は非公開とさせていただきたいと思いますが、極力協議は公開資料をもとに行いたいと思っておりますので、公開としてよろしいでしょうか。協議の具体的な事例については、協議外のところで、事務局から説明させていただきますので、よろしくをお願いいたします。

（賛成の声）はい、ありがとうございます。

それでは、協議を原則として公開して行うことといたします。

これから、傍聴希望者及び記者を入室させますので、しばらくお待ちください。

（傍聴人及び記者の入室を確認後）

委員長（田中委員）

それでは、協議を行います。まず、前回に引き続き調査結果の報告についてであります。報道関係の方におかれましては、写真撮影については、ご遠慮願いたいと思っておりますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、調査結果について事務局よりご報告をお願いいたします。

(事務局)

それでは、まず、資料1の説明をさせていただきます。

「平成28年度入学者選抜学力検査における採点・点検の回数等の調査結果について」でございます。

まず、1の採点・点検の回数でございますが、各学校の方で、それぞれ採点・点検の回数について聞き取りをさせていただいております。10回という学校がほとんどでございます、この10回というのは、そもそも我々の方で、マニュアル

の方に示しております。下に記載がございますように、採点を2回、採点の点検を2回、小計を1回行いまして、その小計の点検を2回、合計を1度出しまして、その点検を2回、計10回というのが基本となっております。この基本の回数で行っている学校が127校、定時制でも17校が占めているということでございます。それ以外に、学校の工夫の中で、11回、12回、13回といった形で回数を増やしている学校もございます。

この中に定時制の高校で1校40回という学校がございますが、これはこの採点を一回行うに当たって、4人の先生で回して行っているということがございまして、4倍かけてやっていたというような事例がございました。実際にはですね、その2ページ以降に、各学校のそれぞれの採点・点検の回数等を書いてございますので、ご覧いただければと思います。

併せて、2番目といたしまして、採点・点検の会場と作業機の状況という事で、各学校に聞き取りをさせていただいております。これは前回、採点・点検の状況はどうだったのかということを受けまして、調査をさせていただきました。会場といたしましては会議室ですとか、それ以外の教室等を使って行っているわけですが、1会場大きな会議室で、まとめてその中で行っている学校が多くございまして、全日制で97校、定時制20校という状況になっております。その中でなかなか収まらないという場合に、2会場、あるいは3、4、5ということで、この5会場というのは、教科ごとに分けて行っている学校というふうに認識をしております。学校によって、会場数が違いますけれども、多くの学校で1会場の中でやっているという状況でございます。それから、作業の機の状況でございますが、これはそれぞれ学校に聞き取りをさせていただいた中で、学校の中で感じているものとして、十分な広さがあったのか、そうでなかったのかということで聞き取りをさせていただきましたが、おおむね広さが確保されているという学校が多くございます。ただ、その中でも、十分な広さでなかったという学校もあるのは事実でございます。今申し上げた内容を2ページ以降で一覧にさせていただいておりますが、この中で、右から3つ目の欄、職員一人当たりの採点・点検の回数という欄がございます。これは実際の受検者数に教科数を掛けまして、答案の枚数を出し、実際にその一枚に対して採点・点検何らかの形で関わった回数、ほぼ10回というのが基本ですが、これを掛けて、実際採点・点検に関わった職員数で割り返したものでございます。多い学校とそうでない学校、まちまちでございまして、やはり、受検者数の多い学校、或いは特色検査などで、教科数が多い学校につきましては、職員一人当たりで何らかの形で採点・点検に関わっている回数が非常に多い学校もあるということで、この調査の中から読み取れるのではないかと考えております。

次に資料2と資料3をご説明させていただきますが、これは濱田専任主幹から

説明をさせますのでよろしくお願いいたします。

(事務局)

それでは資料2をご覧ください。A4の片面のものです。「学力検査における記述式問題について」ということで整理させていただきました。記述式の問題の部分での採点誤りの数が多くあるというところで、書かせていただいたものです。

まず、記述式問題を出題していることに関してということですが、こちらはそこにタイトルで思考力・判断力・表現力を測るというふうに記載をさせていただいているところですが、本県におきましては、平成23年10月に、神奈川県公立高等学校入学者選抜制度改善方針というのを定めておりまして、その中で、改善に関する基本的な考え方を示しております。いわゆる学力の3要素と言われております、基礎的・基本的な知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度いわゆる学習意欲、この三つを的確に把握するというこのために学力検査及び面接を実施するというようにしておりまして、学力検査につきましてはこれまで以上に思考力・判断力・表現力等を測る内容とすることとしておりまして、平成25年度入試以降この形で実施をしてきているところでございます。入学者選抜学力検査問題において思考力・判断力・表現力等の能力を図るということを目的として記述式問題を出題する方向性というのは、他県でも同様に示されているところが多くございます。この様な記述式問題とすることによりまして、受検者が自ら考えたことを記述するということから、主体的で論理的な思考力・判断力・表現力が発揮されて、それを測り取ることができるという考えのもとでこのような形で出題しているところでございます。

実際の記述式問題に関しての採点・点検の作業について、その下のところでご説明させていただきます。本県の記述式問題におきましては、一定の条件等のもとに記述するように、問題文において、指示をしておりますけれども、実際に受検される皆さん、受検者の方々の解答はですね、指定された語句を含んでいて、かつ問題が求めている趣旨であると読み取れる文としても、文として表現をするので、実際には様々な表現が存在します。そこで、県教育委員会としましては、採点上の注意、いわゆる採点基準というふうに通常呼んでいますが、採点上の注意というのを定めておりまして、その中で問題における解答として求められる趣旨を踏まえた適切な正答例というのを示しているところでございます。各学校におきましては、この県教育委員会が定めた採点上の注意に照らして、実際にどのような答案が正答として適切なのか、中間点はどれなのか、誤答とするのか、その分類をするという作業を行った上で、いわゆる採点上の取扱いを整理した上で、採点・点検作業を行っております。校内における採点・点検上の取扱いの整理の仕方は、学校によりそれぞれ工夫して行っておりますので異なっておりますけれど

も、例えばホワイトボードとかですね、模造紙、こういったものを張り出して、そこに正答としたもの、中間点としたもの、誤答としたもの、この分類に従って実際の受検者の記述を書き出して整理する、そういったことをしたり、答案の中でその扱いを正答、中間点、誤答としたものに付箋を貼って整理をする、そういった形で工夫をして行っているところがございます。まず記述式問題についてはそのような形でございます。

続いて資料3をご覧ください。資料3はですね、今申し上げました記述式の問題のうち、特にまとまった文章等を記述する形の問題です。その部分での誤りを問題別に集計したものでございます。そちらにありますように平成27年度入学者選抜、28年度選抜という形でまとまった文章等の記述に関する誤りは、このような形になっております。整理としましては、誤字・脱字の見落としによる誤りがあったもの、指定語句等の見落としの誤りがあったもの、採点上の注意の適用誤りがあったもの、その他という形で分類をさせていただきました。実際にどのようなものがそれに該当するのか、その後ろにつけてございます資料でご説明をさせていただきます。ご覧いただきますと、例えば平成27年度のところで見ますと、国語では採点上の注意の適用誤りの件数が9件ということで、少し多くなっておりまして、数学では誤字・脱字が16件と多い状況がございます。また27年度のところではその他に国語が1件、その他にあるのはこの国語の1件だけですので、後ほどどれがその他に入っているのかということについては、ご説明させていただきます。28年度につきましては、英語で採点上の注意の適用誤りが10件ということで多くございます。その他は圧倒的に誤字・脱字の見落としに集中しておりまして、国語で全日22件と定時1件、数学で9件、理科7件、社会54件と、ほとんどの誤りが誤字・脱字の見落としに集中している状況でございます。それでは、今申し上げましたようなところについて、具体の例で説明をさせていただきたいと思っておりますので、ページを1ページおめくりください。3ページをご覧くださいればと思います。2ページ、3ページが英語に関しての誤りの具体例を記載させていただいたものでございます。英語の誤りでは、28年度のところで特に採点上の注意の適用誤り10件ということで、そちらに集中しているような状況に見えるわけですが、具体的にどれがその採点上の注意の適用誤りというふうに分類しているかということでございますが、3ページの一番上のところでございます。問5の(ア)、写真を撮ってもらう人を探していることに気が付いたときに相手になんと声をかけるかという問題に関しての黒丸がその下の分析結果のところがございます。写真を撮りましょうかのように申し出る表現が、ということで書かれていまして、本来自分がということで表現をする文だと思うんですけども、相手に依頼する表現を使ったものを正答として、誤って正答としていたという「Would you take a picture?」というその文がありますけれども、

相手に依頼する表現は、本来正答ではないものを正答としていたという、そういう語法というか文法上というかですね、そういう誤りのものです。採点上の注意にその語法上の表現といったようなところがございますので、それに反しているというところですよ。

それから3ページの一番下、一番下の黒丸に語法上の誤り（主語の取り違いを見逃していた）というのが1件というふうにあります。これは、中学校に入学してくる新一年生にどのようなアドバイスをしたらよいかという問題です。本来であれば新入生に、このようにするといいですよというような内容表現にすべきところですが、ここでは、「They should take care of new first-year students.」という形で書かれていまして、これは在校生、クラスの生徒がこうすべきだという表現になっており、それを気づかずに誤ってマル（正答）にしていたというふうなところがございます。語法上の誤りを見落としたものです。

4ページをご覧ください。同じように、採点上の注意の不徹底、適用の不徹底ということで、4ページの一番上の黒丸、問6の（ア）に関しても語法上の誤りがあったんですが、それを見落としていた。それから、下から三つ目の黒丸のところも同じように語法上の誤りがあるものを正答としていたというふうなことで、これらの件数を重ねていくと、全部で10件あるといったようなこととなります。

それでは5ページをご覧ください。5ページ、6ページ、7ページのところが、国語の誤りをまとめたものがございます。国語では、やはり採点上の注意の適用誤りの件数がやや多く見られております。27年度のところで、こちらの採点上の注意適用誤り、いわゆる国語でいいますと、表現の問題というふうに記載しているものが、そちらに該当します。上の欄の問3のところの下から二つ目の黒丸、それから一番下の黒丸、下から二つ目のところに表現の問題（主語の重複）と書いています。表現上、主語が重複する形で書かれているものは適切とは言えないわけですが、それを見逃して正答として扱っていたというふうなものですとか、内容に誤りがあるけれどもそれを見逃していたというものです。その下の問4に黒丸が二つありますけれども、一番下の黒丸、こちらの表現の問題を見逃していた、といったようなことで、こういったものがそこに該当しております。

1ページおめくりいただきまして、6ページをご覧ください。6ページの一番上です。こちらは、問5の問題の続きの部分になるんですけども、6ページの一番上の黒丸中間点の記載ミス1件とございます。こちらを私どもはその他に分類した1件として数えております。これはどういうことかと申しますと、例と書いてありますが、この1件しかなく、8点配点されている記述の問題で、誤字があったために2点減点をしていました。解答用紙のところにマイナス2という形で減点を書いていて、それで点数を記載するところに本来は8から2点減点です

のでサンカクで6と記載すべきでした。ところが、減点のマイナス2とメモをした（余白にメモをした）ことに引きずられてしまいまして、得点をサンカク2と記載をしてしまいました。これは採点した採点者の方のミスです。その後、小計のところでは、2をそのまま合計したという形になっております。このようなミスは他に分類するところがございませぬので、これだけその他という形で分類をさせていただきます。それから、28年度の国語の部分では圧倒的に誤字・脱字を見逃していたというものが非常に多くございます。6ページの28年度の間3のところ、一つ目の黒丸が誤字・脱字の見逃していた6件ということで、具体にはそちらに記載がありますけれども、「発言しなければ」の「ば」の濁点が必要なところがなかった、「自信」が右のような「自身」になっていた等々ですね、こういった文字の誤りがあったことを見逃して正答として扱っていたといったようなものです。

同様に問4のところも誤字・脱字「アイデンティティ」が、ちょっと違った形で記載されていたものがいろいろあったにもかかわらず、それを見落としていたというようなものでございます。同じように7ページの方に行きまして、問5のところの、やはり誤字・脱字を見逃していた。ここで5件。実際の例はそこに記載の通りでございます。

それから、国語の場合、少し特徴的なのが問5の最後の黒丸ですが、文末指定の誤りを見逃していた。記述式問題で、文末の表記をこの問題の場合には、そこにございますけれども、「意識を持つべきだ」という表記で終わるように問題文に明確に指示があります。明確に指示があるのですけれども、受検者の方が「意識を持つべきだ」ではなく、「意識するべきだ」とか、「意識しなければならぬ」というような指定されている表記ではない表記をしていたものを見落としていて、正答として扱っていたといったものがあつたということでございます。

それでは1ページめくっていただきまして、8ページをご覧ください。8ページは数学の誤りを記載したものでございます。数学の誤りで、圧倒的に件数が多いのは、証明の問題のところでの誤字の見落とし、ここにかなり集中してございます。平成27年度の間7の欄、下の欄ですね、ご覧いただきますと、採点誤り19件のうち、誤字等の見逃し16件、ほぼここに集中しています。「弧AC」と書かなければいけないところが弧ではなく、ちょっと余計についていてですね、「孤」という字になっていたといったような形のミスですね、そういう誤り、ほんとに字のちょっとした誤りですけれどもその誤字の見逃しがあつたということでございます。

9ページをご覧ください。理科のミスの具体例を9ページに示してございます。理科のミスも、記述のところでの誤字の見逃しが多くなってございます。27年度は、それほどミスそのものがないのですけれども問5の一つ目の黒丸、誤字の見

逃しというのがありまして、10 ページをお開きいただきますと、10 ページまで理科ですけれども、28 年度の間 5、誤字の見逃し 2 件、「体積」の「積」の字が間違っている。間 6 のところの誤字の見逃し、「状態」の「態」の字が間違っているといったようなものですね、この様な記述の中の誤字の見逃しに多くが集中している状況がございます。

それから最後に、社会科です。11 ページから 12 ページをご覧くださいと思います。社会科は圧倒的に平成 28 年度の記述のところの誤字に集中している、ということをお先ほど表で説明しましたが、12 ページをご覧くださいと思います。12 ページが平成 28 年度のまとめたものになってございますけれども、問 1 「ザンビアにおけるものカルチャー経済の現状と対策について」を記述する問題、「ザンビア」という国名を書いていただくところですが、「ザンビア」の「ザ」の濁点がなく、「サンビア」と書いていた。「輸出」の「輸」の字が「論」となっていたり「輸」となっていたりですね、こういう字があった、このような文字の誤り、これが非常に多く合計 38 件あったということでございます。それから、問 6 のところ黒丸の一つ目、誤り 17 件のうち、誤字・脱字の見逃しが 13 件ということでこちらに集中をしています。「日本人の寿命の推移の傾向と政府の対策」というのを読み取って記述する問題で、「健康寿命」とか「平均寿命」といったような文言が出てくる表現になっております。その「平均」の「均」の字が違う、「寿命」の「寿」の字、「健康」の「健」の字、そういった文字が何らかの形で、点が足りないとか線が多いとか少ないとかそういったような、字の誤りがあったというところを見逃して、正答としていた、あるいは減点をしなかったといったものが多く集中していたということでございます。

以上のように記述式問題において、すごく多く集中しているのは、やはり誤字・脱字、内容の読み取りのところに集中しているがためにということなんですけれども、誤字の見落としをしていて、見逃していた、ということはかなり集中して見られたということでございます。資料 3 については以上でございます。

(田中委員長)

はい、ありがとうございました。では続きまして、協議に移りたいと思います。

ただいま調査の結果について報告がありましたが、実際に採点・点検に関わった答案の採点・点検の回数を見ますと、関わった教員に限りがありますので、受検者の多い学校ほど一人が採点・点検に関わる回数は多いという実態は見て取れますけれども、そうした回数の関わりというものがあるといことは、採点者の負荷ということで考えられるかと思えます。

また、今、説明がありました記述式の誤りの多くが誤字の見誤り、指定語句の見落としによるものがほとんどで、採点上の注意の不徹底は、校内で事前に確認



し、徹底しようとしていたにもかかわらず、統一できなかったかというものでした。この調査の結果に係るご質問、また原因についてご意見をお受けしたいと思えます。いかがでしょうか。はい、松本委員、どうぞ。

(松本委員)

前回、環境との関係ということでご質問させていただいて、調べていただいたわけなのですが、ざっと見て、部屋や環境とミスがあった件数などとの傾向や特徴のようなものは見られたのでしょうか。

(事務局)

実際には部屋を多く分けて教科ごとにやっている学校もありますが、必ずしも教科ごとに細かく分けて行った結果、その学校は誤りがなかったかというところという傾向ではございませんので、一会場で行っていても誤りがなかった学校も当然あります。そういう意味では、誤りに関わった教員の方から、狭かったという意見を聞き取ることはできていますけれども、それが全体で見まして明確に、例えば一会場で行っているからミスが多いというようなことはございませんでした。

委員長(田中委員)

よろしいでしょうか。ほかにはいかがでしょうか。

今、環境についてのご質問が出ました。その点について、特に教員への負荷、業務の内容もありますけれども、前回もご質問がありました、時間や環境の要因が関係しているかという点では、あまりはっきりとした関係はそう見えないということでございます。注意の不徹底のところでは、やはりミスというのが、ヒューマンエラーの部分もあると思いますが、組織上のエラーといいますか、これだけ10回も点検しているにもかかわらず、それが機能していなかったというところはヒューマンエラーと組織上のエラーの両面があると感じるところでございます。

いかがでしょうか、ご質問があれば。資料の2の一番下の記述式のところでホワイトボードや模造紙に記述を書き出し、という表現がございますが、これは採点上の注意の中に書いてあるわけではないですね。各学校で工夫しているところではそうしているという理解でよろしいでしょうか。

(事務局)

そうですね、採点上の注意には、ホワイトボードに書いてということは記載してございません。各学校の工夫の中でやっていただいている状況です。

委員長(田中委員)

ご質問がなければ前回の聞き取りの中で、記述の内容ばかりに注意を払ってしまったために誤字や脱字に気付かなかったといった報告が学校からの聞き取りの中で出てきたかと思えます。これについてしっかりと教科担当が採点する。そして、それ以外の誤字や脱字については教科担当でなくてもできると思えますけれども、そうしたチェック体制をとっていなかったことが原因として挙げられるかというふうに思います。記述式とチェック体制の問題、内容と字句チェックの分担の問題。そこが教科により縦割りになっているような場合には、入試の業務の協力関係、意思疎通が上手くいっていなかったということなどがあるのではないかと思います。

また、実際に教育委員会から示されている採点上の注意には原則が示されているわけですが、先ほどの説明にもありましたように受検生の解答は大変千差万別で、それだけでは対応できないので、原則の範囲内で校内で再検討の取扱いを統一するところを、その取扱いの徹底ができなかったというような実態が明らかになったということではないかと思われます。

その他についてご意見を伺いたいと思えますけれども、特にご質問がなければ、調査をさらに行って欲しいところがあれば、あるいは調査でこういうところがもれているのではないかということがあれば追加で行いたいと思えますけれども。

(種田委員)

結果が出てきているところは、結果的にミスが見つかったところが件数として出ていますよね。でも、採点の段階でミスしたのだけど、点検でそれをちゃんと直して、というのは件数として出てこないわけですね。

(事務局)

そうですね。実際に採点をして、採点のところでは誤りがあって、本来の点検のところでは点検機能がしっかり働いて、そのミスに気付いて修正が行われて結果的に正しい採点になったというのはここに入っていません。それを全部拾うのは、正直申し上げてなかなか難しい状況です。

(種田委員)

何を言いたいかという、ミスがたくさんあるところは結局たくさん点検でミスを訂正していかなければならないが、元々ミスが少ないところは、点検の結果、正答になるというのは、殆どが正答になってしまうと思うのですね。今、どこに問題があるのかというときに、採点上の問題ばかり見てしまうと点検のところはどうなのかがよくわからないのですね。採点と点検の両方がミスになっているか

らミスは出てきているのであって、採点のところに非常に問題があるのであったら、そのところも徹底して、採点を2回のところを3回にする。そうしないといけないし、点検のところが非常に大切だというのなら、点検を2回でなく3回するとか。結果的にミスとして出てきたものは、どこに問題があったのか、ちょっと見えてこないですね。両方ミスなら、採点もミスだし、点検も見落とししたということですから、それで出てきているんだけど、どこを改善しなきゃいけないのかというのがちょっとわかりにくいかなと。私自身は、採点のところより点検のところが一番重要かなと思うのですね。ミスは絶対出るものだと思うので、採点ミスは当然あるのだけど、それを点検のところでミスはないものだと思い込んで、ミスをしている。だから、点検のところがいかにしっかりできるかということで、採点2回、点検2回というのが本当に良いのかどうかという、採点2回、点検3回のほうがよいのかもしれないし、そんなふうに思うのです。

(事務局)

そうですね。これまでも2回議論していただいた中で、実際にデータ的にはなかなか読み取れないということを考えますと、当然採点のときも誤りがあり、点検も十分機能していなかったということ、それが複合的に重なり合って今回多くのミスが見つかったというふうに思っています。そういった意味では、前回ご意見をいただいたように採点のところでは2系統でやるとか、それから点検のところでも更に何か工夫を加えていくという複合的な被せ方をしていかないとミスはなくなるであろうと我々のほうでも考えているところでございます。

(林委員)

点検者の方は、例えば社会の28年度の間1の問題で、そもそも問題文にザンビアという言葉が何回も書かれているわけです。それが、サンビアと書いてあることの誤字の間違いがこれだけ見つからなかった。点検の方というのはどこまでを点検しているのか。解答をちゃんと見て、問題の正答と照らし合わせて見ているのか、単純に、採点者が誤りなく採点している、要するに何点とかマルとかサンカクとか書いているところだけを見ているのか、どの程度まで点検しているのか。

(事務局)

当然、点検ということでいけば、内容と誤字・脱字を含めて点検して欲しいと我々は思っていますけれども、実際にそこは内容にばかり注意がいて、誤字・脱字が見つからなかったなど、そういう誤りが今回、実際に出てきている状況からすれば、我々の思いとは裏腹に、内容と誤字・脱字の両方が結果的にチェックされていなかったという実態はあるのかなと思います。

(林委員)

稲田先生にお聞きしたいのですが、中学校の先生方の立場からして、ザンビアをサンビアと書いたからだめだと言われるの、例えば数学の例で言うと、「弧」という漢字を間違えただけで、数学の誤りではないですよ。それでマイナス2と言われること、数学的には解けているわけですよ。これ選択問題だったら多分、合っているですよ。これ自体が、我々大学側からすると違和感があるのですけれども、どう思われますか。

(稲田委員)

非常に悩ましい問題だなと思っています。中学などでも定期テストなどを作るとき、条件としては漢字で書きなさいとか、語句もきちんとというところを視点とする場合もありますし、大筋中身が合っていればというものもありますね。ですから入試のときにこれが減点でということについては、そういう基準だと言えればそれまでだと思うのですけど。どっちというのではないと思うのですね。

(林委員)

これはこれで良いということですかね。採点した側からするとそういう心理が働くのかなというふうにちょっと思ったのですね。

委員長 (田中委員)

今、調査の結果をご報告いただいて質疑をしております。そのほかにはいかがでしょうか。今年度特に増えているということはですね、どうしたことが原因なのかなというのが、やはり問題の質が27年度と違うのか、それとも今のご意見にもあったのですが、ザンビアと何度も問題文に書いてあるのにサンビアと書いてしまうくらいに書く力が落ちているのではないかということも、考えられない漢字を書いたりなどというようなことは、これ大学なんかでもよくあることなんですけど、そうしたことも関係しているのかなという印象を持ちました。それは印象ですけれども。

いずれにしても、10回という回数だけを追い求めたところがチェック機能を上手く働かせることに繋がっていないという実態ははっきりしてのではないかと思います。通常定期テストや実力テスト等の採点の方式とはだいぶ入試とは違っておりますので、採点者がかなり戸惑っておられて、こうしたことに慣れていらっしゃらない方は集中できなかったという原因もあるのかというふうに思いますけれども、調査としましては、聞き取りまでやりましたし、また、先ほどは具体的に答案のコピーまで見ておりますのでこれ以上の調査は必要ないかという感じがいたしますけれどもよろしいでしょうか。

何度にもわたって、調査会でいただいたご意見、そして事務局にはそれに対して対応していただきましたので、私のほうで見まして中間とりまとめの検討資料として本日用意をさせていただきました。次回もう一度、中間のとりまとめとして整理したいと思いますので、本日はこの資料を基に議論を進めたいと思いますがよろしいでしょうか。

では、資料の4をご覧ください、この資料について事務局から説明をいただきたいと思います。

#### (事務局)

はい。それでは私の方から、資料4として、中間取りまとめ、検討資料をご覧くださいと思います。委員長の方から、これまでの議論の取りまとめの指示をいただきまして、取りまとめさせていただいたものでございます。目次は割愛させていただいて、資料の1ページをご覧くださいますと、ちょっと細かい内容の説明は省略いたしますが、調査改善委員会の設置の趣旨から始まりまして、入学者選抜における採点誤りの概要、この概要は、我々の方から第1回で報告させていただいた内容を引用させていただいております。この部分の説明は省略させていただきます。

4ページをご覧くださいと思います。4ページは、これまでの調査結果から考えられる誤りの原因分析ということで、第1回、第2回での結果から考えられるものを整理してございます。これにつきましても、これまでに資料等をご提出させていただいておりますので、その内容が重複しているということで説明は割愛させていただきますが、5ページのイというところでございます。採点時間、休憩の取得、採点環境等に起因する原因分析というところがございます。ここでは前回の調査結果の中でも学校からの聞き取りについては報告をさせていただきました。①の部分です。これは割愛させていただきますが、②のところ、これまでに本委員会から出た意見を取りまとめております。今後、再編統合により受検者数がどこかの学校で偏ってくると、当該校が今までと同じやり方、日程でできるのか心配であるということ、6ページに移りますけれども、会議室での採点環境に問題があったのではないかと、ケアレスミスを誘発しやすい環境の改善が必要であるということ。それから相関関係のデータからは読み取れないかもしれないが、特定の教科では、採点に時間がかかるなど時間的なプレッシャーはあったと考えられる。採点にあたり、ゆとりや余裕をもって臨む環境を作ることが必要ではないかということ。それから、金曜日という一週間の疲労がたまっただけから採点がスタートしているということがミスを誘発しているのではないかと。また、朝のスタートから誤りが発生しており、面接が終わって翌日、一回リフレッシュする時間を設けてから採点を始めたほうが良かったというような意見を今までのい

ただいておりますので、ここに整理をさせていただきます。

この採点環境等につきまして、現時点での考察ということで、取りまとめの中でふれておりますけれども、四角囲みの中で、採点に要する時間については、合格発表までに一定の期間があるとはいえ、教科によって採点時間にばらつきがある中で、時間的なプレッシャーがかかり、焦りが出たり、集中力が維持できなかったりしたことが、誤りの原因の一つとなっている、合格発表までのスケジュール管理が綿密とは言えなかったのではないかと、特に受検者数の多い学校のスケジュールに合わせて日程を組む必要がある、他の業務と並行して採点が行われているならば、役割分担を明確にしておかないと、ミスを生じさせる原因となる、というようなことを、ここでまとめております。

次に採点環境といたしまして、採点日を臨時休業にするなど、採点に集中できる環境を整えているとはいえ、会場が一箇所で全教科が集中すると、他の教科の採点協議の声や進捗状況が気になり、集中できないことなどが誤りの原因の一つとなっているということで、まとめていただいております。

次に、(2) ミスの起こりやすい箇所の特定による原因分析です。これにつきまして前回資料等提出させていただき、これでそういったものから見える部分について、ご説明させていただきました。説明といたしましては7ページのウ、本委員会から出た意見になりますけれども、この委員会の中では、採点ミスの内容からすれば、点検が機能していなかっただけなのではないか。採点よりも点検の充実に力点を入れて対策を考えるべきである、採点を余白に行うこと自体が原因の一つである、採点・点検欄を設けるべきである。それから、解答用紙の狭い欄にいくつものチェックが入れば見誤りも起こる、採点・点検マニュアルの見直しが必要である。それから、これまで生徒のことを考えた解答用紙を作成したのであろうが、これからは採点者のことも考えた解答用紙を作成すべきである。8ページに移りまして、小計を算出する際に一手間かけなければならない配点というのは見直すべきである。それから、神奈川は記述式のウェイトが大きいのではないかと。より採点が簡易な記述式問題を検討すべきというような意見がこの場に出てきております。

そういった意見を踏まえまして、現時点での考察として作問・出題形式については、限られた時間で採点・点検を行う必要ある入試において、学力検査の出題形式や配点の方法が採点誤りの原因の一つとなっている、それから解答用紙については、直接解答用紙に採点する方式にもかかわらず生徒の答えにかからないように採点するため、採点・点検するスペースが少なく、採点を意識した用紙になっていないことが、採点誤りの原因の一つとなっているとまとめてございます。

次に採点・点検方法につきましては、採点者が単独で受検者の答案と正答表を見比べて行っているが、記号選択式問題については正答と見比べることなく、採

点・点検者が暗記して採点していた実態もあり、こうした採点方法をとったことが、採点誤りの原因の一つとなっている。それから採点者1、これは採点者1人目ということですがけれども、この採点后、その次の採点者にさらに2人の点検者がおり、また、小計・合計の算出の際にも算出後に2人の点検者がいると。そういった中で、最初に採点したものに誤りはない、ましてや、単純な記号選択式問題において誤りはないという思い込みがあり、採点結果をそのまま追認したケースがあったことは、点検が機能していなかったと言わざるを得ない。また、2人目の点検者については自分の前に点検が行われているのだから、誤りはないという思い込みがあったことは、前の採点・点検結果に引きずられていたと考えざるを得ず、同様に点検が機能していなかったと言わざるを得ない。また、マニュアル通りに点検の際にレ点をつけ、それを斜線と見誤って採点に誤りがあったことなど、マニュアルの中にも採点誤りを引き起こす原因につながっているという面があるというまとめをしていただいております。

次に(3)採点誤りに関わった採点・点検者の教科及び職の関係ですがけれども、これも調査結果で前回お示しさせていただきましたが、職やその担当教科によってですね、著しい何か特徴が見えるということでございませんでしたが、この中のエの部分で、これまでご意見をいただいております、採点者の教科、職とは関係ないが、新規採用職員に対する研修について次のような意見がございました。新任の教員も採点に関わると思う、実際の採点を意識したレクチャーなど個別の説明や指導などを行うべき、またベテランの教員の中には採点で誤りを起こしやすいポイントを感覚的に分かっているものがある、そうした経験値を活かして欲しい、という意見をこれまでにいただいております。

ここで、考察といたしましては今回、誰にでも起こり得る可能性ということで、特定の教科に偏って採点誤りがあった、あるいは特定の職に偏って誤りがあったということではないことから、逆に言えば、誰にでも起こり得る可能性があるという前提に立って、学校の採点・点検体制全体の問題としてとらえ、改善策を打ち出す必要があるというふうにまとめていただいております。

最後に、答案用紙の誤廃棄の原因分析について、これは、これまでの調査結果から明らかですがけれども、その下のまとめのところ、神奈川県教育委員会行政文書管理規則の規定に則って、本来1年間保存すべき文書を保存期間経過前に廃棄してしまったというもので、規範意識が低かったと言わざるを得ないということでございます。

10 ページ4番のこうした原因を踏まえて、現時点で考えられる再発防止改善策の方向性ということで、(1)から(5)までまとめていただきました。委員長とも相談の上でまとめさせていただいております。これにつきましては一つひとつ議論をいただければと思いますけれども、採点・点検に専念できる環境の確保、

採点・点検方法、作問・出題形式の工夫・改善、それからマークシートによる採点の導入検討、採点・点検に対する意識の向上、規範意識の向上、研修の充実等ということで取りまとめておりますので、後ほど委員長からご説明いただければと思います。

最後に、平成 29 年度入学者選抜実施後の検証方法等についてということで、12 ページに記載をさせていただいております。平成 29 年度の入学者選抜合格発表後、入学までの間に、採点誤りについて検証を行い、誤りが無かったことを証明しなければならないということで考えられるものとして、受検者からの答案を確認したい旨の申出に基づき、合格発表日以降に答案の写しを速やかに交付できる仕組みを検討する。あるいは、県教育委員会事務局において、抽出による再点検を実施するということが現時点で考えられるということで整理をいただいております。

事務局の方からの資料の説明は以上でございます、これについて委員長の方でご確認いただければと思います。よろしく申し上げます。

#### 委員長（田中委員）

ありがとうございます。それではまず、原因の分析ですけれども、これまでの議論を取りまとめてみますと、資料の 6 ページ、囲みの現時点での考察として書かれているところの原因のまとめ方でよろしいでしょうか。何か漏れがあるとか、お気付きの点があれば、ご指摘していただければと思います。ご発言いただいた内容をこの中に入れ込んでいるというふうに思いますけれども、よろしいでしょうか。特にご意見が無ければ、続いて出題形式や解答用紙、採点や点検方法といったところから言えることは、8 ページのところにもまとめて囲んで書いてあります。作問・出題形式、解答用紙、採点・点検方法、記載されたことについてこれでもよろしいでしょうか。今回、特に解答用紙や解答欄、またチェック欄等、実際に委員会で検討しまして、そしてこの原因が一つ出てきているものではないかと思っておりますので、誘発する要因としての解答用紙というのは重要なところではないかと思われま。よろしいでしょうか。では続いて 9 ページ。はい、どうぞ。

#### （土佐委員）

土佐でございます。現時点での考察、作問、出題、採点、点検方法のことでございますけれども、採点・点検方法のところ、先程、種田委員、それから林委員からご発言がありましたことと関連しますけれども、特に記述問題の採点について、採点者 2 回、点検者 2 回という中で、最初の点検者は全体を見る、2 番目の採点者はどこを見る、点検者は誤字を見るというような役割分担が今できていないのではないかと思います。また、私が答案用紙を採点するのならば、ザンビ



アをサンビアと書いた生徒が一人いたとすると、サンビアの部分全部を見直す訳ですよね。一人でもサンビアという答案を見つけたら、ひよっとすると同じような子がいるかもしれない、みんな見てください、注意してくださいと、それを模造紙に書いて張り出すなど、どこまでできていたのかなと思います。これだけの誤字、脱字を見ますと、それがいわゆる種田委員がおっしゃっていた点検のどこを点検しているのかという役割分担ですよね、その辺の点検のポイントが少し欠けていたのかという印象を持っています。ですので、ここでそういう分析ができるかできないのかは、正直言ってデータが無いのでできないかも知れませんが、改善策というところにおいては、2系統でやるということも、もちろんそうなのですが、もう少しポイントを絞ることも必要なのかと、そのように考えます。以上です。

#### (種田委員)

枚数がすごくたくさんあって、全部集中力を持って採点・点検するのは非常に大変な作業になると思います。もう少し絞って、例えば、ボーダーラインのところ、それよりはるかに上とかはるかに下とか、そういうところは、もし仮に見落としがあったとしても、それほど大きな当落に関わらないですが、ボーダーのところは、その1点2点が非常にきいてくる場所ですから、そこは絶対にミスが無いようにと、ボーダーのところは最後もう一回点検するという事でやっているんですよ。

#### (事務局)

今、実際に採点・点検が終わった後に、最後に合否の判定の前にそういった形でいわゆる合否がひっくり返らないようにやっている学校は多くございます。ただ、実際にはその中で合否結果が変わってしまった生徒さんがいたことも事実でございますので、そこは、今までは、我々はマニュアルの中で規定して必ずそういうふうにするような指示はしておりません。そういう意味では、そういったことを少し徹底するようなことも、一つの方策としてはあるのではないかと考えております。

#### (委員長)

ありがとうございます。今、土佐委員がおっしゃったことは、具体的にはこの8ページの囲みの中で書くとしたら、どの辺に書いたらよろしいでしょうか。下から2番目の項目の辺りにポイントを絞り込んだチェックが十分行われていなかったというふうな原因として書いた方がよろしいでしょうか。では、あとでまたお考えいただくということで、中間のまとめの中にも記載した方がよいというご

意見であれば、具体的にはどの辺がよいのかと。

(土佐委員)

分析をして、載せてよいものかどうか迷うところなのですからけれども、少なくともこの記述問題が続くのであれば、方策としては必要があるものではないかと思えます。

委員長（田中委員）

ではこの辺をもう少し入れ込めるところは、また考えていただければと思います。それから、種田委員からのご指摘のところは、9ページの誰にでも起こり得る可能性ということで、学校全体での合否に関わる場所の採点・点検体制をさらにもう一つ入れる必要があるというご意見ではないかと思えますけれども、もし、加えられるようであれば。それから先程出ましたけれども、もし、ここに挙がってきていないのですが、校内でミスが実際に指摘されて修正されるような訂正があったケースがあると思うのですが、それが、他の採点者にも共有されるのかどうか、ここ間違っているよというだけで終わるのであれば、あっ、そういうことがあるのだという形で、全体の注意喚起が行き渡らずに、ただミスしたよということで個人的に終わってしまうところは注意喚起にならないというようなことがあるのではないかと。そこら辺を少しマニュアルの中でもですね、先ほど採点基準のホワイトボードへの書き出しというものがありましたけど、何問のどこに、例えば先程サンビアという例がありましたけれども、そうしたものが全体の中で共通化されていくようなやり方も考えていけるといいかなと。それが行われていなかったということが問題ですね。チェックが機能しなかったというだけでなく、チェックして、そこでフィルタにかかったとしてもそれは全体で共有されないと注意喚起の意味をもたないと。組織全体の緊張感を共有するためにもそうした作業が必要なのではないかと、場合によってはそういうこともマニュアルに書いていただくとよいかと思うのですけれども。

(九石委員)

今の点に関連してなのですが、気持ちの持ちようとしての緊張感を書いてあるのですが、そのマニュアルとして、どのような視点で点検、採点をするか。例えば、一度目は記述問題については誤字・脱字について採点をするとか。2回目の採点は内容を見るのだというように、何度も採点・点検をするのであれば、その回のポイントといいますか、それを少し分けることで、同時に見なくてはいけない内容と誤字・脱字を同時に見なくてはいけないがゆえに見落としていた部分が、見落としがなくなるのではないかというふうに、そういう意味合いで土佐委員が

おっしゃったのかなというふうに私は受け止めております。もう一点なのですが、8ページの採点・点検方法のところでは、欄の部分、採点欄の部分は、含まれていると思いますので、もう一点ですね、マル、バツ、そして点検のところは「レ点」を打つようになっている。その「レ点」は点検2回ですから、二つ打たれます。でも「レ点」ですから同じです。それが段々作業量が増えていくに従って惰性になってきてしまっているのではないかというのが、この点検が機能しなかったもう一つのあるいは、改善点なのかなと私自身考えています。手というのは運動で「レ点」を打ちますので、運動することにより、思考と運動が係わってそして採点という作業を行っていますので、そこの部分をたとえば「レ点」二つではなく、違う記号にするとか、あるいは、マルかバツかをきちんと判断しなければ書けないような点検の記号にするとか、何かそういう部分の工夫が、点検2回行ったにもかかわらず見逃してしまったという改善点に繋がるのではないかと。そういう部分も含まれているこちらの考察点であればと思います。

委員長（田中委員）

8ページのところ、少しその辺のことを書き加えていくということによろしいでしょうか。はい、どうもありがとうございます。それでは、原因究明としてこのあたりでとりまとめていきたいと思います。次にどのような再発防止策、改善策を打ち出していけば良いか。10ページ以降のところで一応5点をまとめさせていただいていますが、もう一度申しますと、採点・点検に専念できる環境の確保、それから採点・点検方法、作問・出題形式の工夫・改善、マークシートによる採点の導入の検討、採点・点検に関する意識の向上、規範意識の向上、研修の充実ということで、そのポイントをそれぞれ順番にご意見をいただければと思います。何かここに書きましたもの以外に何かご意見がありましたら。

（松本委員）

ここにいくつか項目がありますが、これはそもそもマニュアルにすべて書いてあることが盛り込まれるということが大前提ということによろしいですか。結局、マニュアルがとても大事でそれが不徹底、それがその通り実行されていないがために起こっていることもたくさんあると思いますので、これでいろいろ書いてあるマニュアルをどうするかというところを触れてなかったもので、この辺をどういうふうにするのかという方向性は踏み出すべきなのかなと思いましたので、いかがでしょうか。

（事務局）

実際には、基本マニュアルには、いわゆる採点・点検の方法について書いてあ

るのが現状であります。ただ、今ここに書かれている環境の確保ですとか、徹底すべき部分は実際にあるかと思しますので、それについては、マニュアルの中に全部盛り込むのか、それ以外のところで記述して各学校に配布するのか、そこはちょっと最終的に我々の方で工夫はさせていただきますが、いずれにしても各学校に、最終的にどうやるか決まった段階で決定する方向でそこはきちっと方向を付けてやりたいと思っています。

補足させていただきますと、マニュアルの見直しという部分については、先ほどのような方向性が意見をいただいていますので。マニュアルの見直しについては、当然我々も検討していきたいと思っています。それ以外の徹底する部分については、マニュアル以外のところで徹底することもあるだろうということで申し上げました。

#### (遊部専務理事)

何度かお話をさせていただいているのですけれども、前回の話にもありましたが、マークシートの採点の導入なのですが、実はわたくしども PTA 協議会の中で、役員会ならびに会長ともみんなて話をした結果、神奈川県はこの入試制度、学力向上というところでものすごく力を入れて、今のこの入試の問題集作成にあたっているところで、みんなの意見をまとめますとマークシートには保護者としては、なるべく導入を避けていただきたい。と言いますのは、自分達の思考力、そういった子ども達の解答を試験の時に出示していただくことによってモチベーションを保ってもらいながら、学力の向上に繋げていくということにしておりますので、マークシートで人の成果を測るというやり方は、保護者としてはできるだけ避けていただきたいという話しかけでございます。さっき聞けば良かったのですけれども、点検等をやる先生方の体制なのですけれども、前の回で先にチェックをされた先生がベテランの先生で、思い込みで「あの先生は間違いない」ということがあったかと思うのですが、例えば点検回数を減らすにしても、先に新人の先生をチェックの一番とし、次にチェックをするのが、長年やられているキャリアをお持ちの先生というやり方のほうが、初めて採点に係わる先生方ももう少し気持ちを深く入れながらしっかりやろうという感じでできるのかなと。なかなか先輩に物申すというのは、どこの業界でもできませんので。そういった部分も含めると先に新人の方にしっかりやれよと。みなさんで事前のレクチャーを受けながらやるというやり方のほうが、間違いも減らせるのかなと私は考えています。

#### 委員長（田中委員）

今のご意見について何かありましたら。

(事務局)

今の後半部分の話で、ごもっともな部分が多々あるのですが、実際の採点の現場はですね、結局今のやり方でやりますと、若い人達が最初に一斉に採点をするということになると、その間、ベテランの方々は何も仕事がないような状況に陥る。実は、すべての教員が同時に一斉に答案の束をそれぞれ一束ずつ持って採点をして、終わるとまた机の真ん中あたりに戻して、まだ採点が終わっていない束を引っこ抜くというのを全員でやっております、順番に誰がこれをやるということができないというか、それをやると非常に作業効率として時間がかかってしまうということになりますので、なかなか難しいかなという感じはしています。要は10束くらいあるものが真ん中にどんと積まれていて、それを囲むように教員が座っているのです。で、すべての教員がまず一つずつ束を持って、責任を持って採点1をやる。終わったところで、まだ中に採点がされていないものがあればそれを引っこ抜いて自分で採点をする。また採点1が終わっている束があれば、採点2にかかる。というようなことを同時にやらないと、なかなか日数の中で採点を終えるというのが厳しいような状況でございまして、あとは、どこの社会もそうかもしれません、今、教員のベテラン、若手の構成自体も非常に偏りがございまして、なかなかうまく機能しないという状況、先程のやり方をするのが一番よいのかもしれませんが、なかなかそれができないような状況がございまして、あと、マークシートにつきましては、客観的な問題ばかりになるというイメージがもしかしたらおありかもしれませんが、問題の作り方によっては、思考・判断力を問うような問題も充分出せますし、今のセンター試験なんかでも知識だけを問うような問題になっていないこともございまして、確かにマークシートというともう覚えていたことをどれか選ばせるというイメージもおありかと思えますけれども、問題の出し方、作り方によっては、充分、学力をもっと深く見るような問題でもマークシートで対応できるというようなことも今可能でございまして、もしマークシートを導入することになれば、そういうことも我々で研究していかなければならないかなと思っております。参考までに。

(林委員)

私も、大学の入試をずっとやっていて、基本的には記述方式の方が好きなのです。好きなのですけれど、正直言って記述方式の方が受験生の方側からすると、現在起きているような、要するに正しい採点されているか不安感が付きまとうと思います。今、岡野課長がおっしゃったとおり、今の入試センター試験の問題も形も知識の量だけでなく、表現力は無理ですが、マークを塗るので、思考力、判断力というものを問うような問題、随分良いものができてきていますし、今、高大接続システム改革会議で議論されて、この前、新聞にも見本問題が出ていまし

たけれども、非常に思考力を問う問題もできていますので、今度はマークシートで選択問題が増えるということは、今の採点の問題が作問というところに問題が変わっていくと思います。そちらの方のウェイトが大きくなってくる。川上の方に非常に重要なことが起きてくるわけなのですけれども、そこはぜひ見守っていく必要があるのかなと思います。要するに川下が楽になると川上が大変になるし、今は正直、川上が楽しんで、楽しんでいないと思いますが、川下にしわ寄せが来ているのかなと。

(林委員)

先ほど種田委員がおっしゃったと思うのですが、ボーダーの意味というのは、いま起きているのだから点検されていないのかもしれませんが、実際、普通に考えてボーダー付近というのは見る。要するに全部の答案用紙をめくって、確認するというのを例えば管理職のクラスの方々が最後にやるとか、そういうようなことは、マニュアル上は書かれていなくても暗黙知でやられているのか、そうではないのか。

(九石委員)

はい。おっしゃるとおりのところが多いと思いますが、それを行っているのか、行っていないのかデータはないと思いますし、マニュアルにもないことですので、今おっしゃられたように学校の判断でやられているところは多いかと思います。またボーダー付近だけでなく、もう一度全科目の全受検者の答案を管理職を含め、コアな職員で見ると、そういう学校もあると聞いております。

(林委員)

ずっとお聞きしようと思っていたのですが、採点の業務に関してですけれども、管理職つまり校長先生や副校長、教頭先生の役割というのは、何と明記されているのですか。

(事務局)

採点・点検の中で、管理職の役割として何をしなければいけないという明記は実際にはございません。基本的には、管理職は採点・点検のいわゆる全体を管理、監督する者として、きちんと採点・点検会場に必ず常駐して、いわゆる職員から相談を受けることはあるかと思いますが、全体を統括する立場ということで、採点・点検には、今お話にあったとおり職員が採点・点検が終わった後で、もう一度管理職の方で改めて確認することがあるということは聞いています。

#### (事務局)

補足ですけれども、特に記名とかですね、記載というのがないというのは、逆に言うと、校長が、入学者選抜以外でも、教育活動のすべての最終責任者、最高責任者であることは自明のことですので、入学者選抜の最高責任者は校長であると改めてどこかに書くという必要がないというのでしょうか、そういうことをございまして、例えば採点についても、合格者を決めるということについても最終的に責任を負うのは校長であるということは、学校の校長の役割という全体の中では明らかなことなので、特にそういうことは明記していない。副校長、教頭については、学校教育法に書いてある副校長、教頭それぞれの校長を助けるというようなところの中で、そこから延長していることなので、やはり書く必要がないというか、自明のことであるということをございますので、責任の分担とか、こういう責任があるということを入学者選抜の、例えばマニュアルとか要綱の中できちんと明確に記載はしておりません。ただ、それは決まりきっているというか、あらかじめ定まっていることという捉えではおります。

#### (折笠委員)

多分、学校で入選委員会というのを作っていて、そこには管理職は必ず入る。教頭、副校長が入って、そこが統括本部として、その上に校長が、管理監督するという形になっていて、それは採点に時にも必ず入選本部が立ち会って、疑問点については、統括、入選委員会の本部が仕切るというふうになっているのでないかと思うのですけれども。そういう意味で学校としては、組織的にやっていると理解しております。

#### (九石委員)

今おっしゃられたとおりでございます。私もいくつかの学校を経験しておりますが、教頭、副校長で入選委員、あるいは入選事務局というところのまとめを教頭、副校長で行い、その委員会事務局の会議の際には、必ず教頭か副校長がそこに同席し、それをコントロールし、そして承認指示の下に入選事務局が動く。そのことについては、逐一校長に報告。それで校長が軌道修正をかけなければいけないところはもちろん指示いたします。採点・点検の会場にも入選事務局、そしてそれを統括する教頭、副校長は同席し、採点の訂正があれば、その印も教頭、副校長が押すという場合もマニュアルに記載されておりますので、すべての業務について、教頭、副校長がついて回ると言いますか、そういう形で管理はされております。

委員長（田中委員）

はい、よろしいでしょうか。11 ページの（4）のところにですね、管理職が声掛けを十分に行うことで、誤りのない採点・点検に対する意識を向上させるという一文があるのですが、声掛けだけでいいのかどうかですね、最終的な点検といいますか、そこまで踏み込んで書いてもよいという感じがいたしますが、合否に関わるところだけでも任意ではなく、ぜひ必ずやるということを徹底していただく必要があるのではないかと思います。

何か漏れているところとかございませんでしょうか。お気づきのことがあれば何でもおっしゃっていただければ。はいどうぞ。

（稲田委員）

マークシートというのはいろいろ課題もあるのかなと私も思っています。導入も一つの方法かなと見ている中で、肝心のマークシートのところはまず、採点誤りがなかった学校が 30 校あって、根本的なところですよ。採点誤りがなかった学校は採点ミスがなかったのかもわかりませんが、採点ミスがあったのかもしれないけれども、点検のところでクリアしている。そう考えるとやはり採点ミスはある、ただ点検が機能しているかどうかというところを、もう少しいろんなご意見ありましたけど、工夫とか改善していくというのが一つ具体的なポイントになるのかなと感じました。そういう学校もぜひモデルにしてほしいと思いますし、また各学校の方に努力していただくと同時に教育委員会にも入試の業務に関して、少し全体に何か注意喚起をしたり、特にこのあたりを情報共有しなきゃいけないという場合には一斉に情報を流していただくというような工夫も必要ではないかと思います。

委員長（田中委員）

ありがとうございました。再発防止改善策の方向性について、中間まとめで確認させていただくということで、最後に 12 ページのところに平成 29 年度の入学者選抜実施後の検証方法についてということで、ここではあえて合格発表後、入学までの間に検証して、誤りがなにか、なかったことを証明しなければならないというふうにしております。4 月に検証する方法もありますけれども、もう二度と合否が変わることがあってはならないわけでありまして、まずは3月中にできることを確実に行って、誤りがなかったことを証明してもらいたいと考えます。この部分について、ご意見がありましたらと思いますが、いかがでしょうか。

誤りがなかったことを証明しなければならないと書くと、これ、かなり強い縛りになると思いますけれども、どのような形で証明していくか、抜き打ちや抽出でチェックしていくという一つ方法として「等」と書いてありますけれども、先



ほども出ましたように、特にミスが出ている問題とか箇所については情報共有して、もう一度その箇所についての点検を促すとかいったようなことも、合格発表後もやるべきことはぜひやっていただきたいと思います。これは情報公開開示のところから出てきたということが一つ問題ですよ。そのところの、組織としての責任体制というのを検証としてやっていかないと、受検生から情報開示を受けて点検してみたらという今回のようなケースはぜひ避けていかないといけないということではないかと思います。もちろん開示は、方向はもっと広げてできるだけ簡略にやっていくという方向も必要かと思います。組織としてできることはぜひ検証としてやっていただきたいと思います。ですので、ここを証明と書くか、調査と書くか、ちょっと迷うところですが、証明と書くとかかなり証明の仕方についてどうだろうなという感じがいたしますので、ちょっと検討させていただくと。他の方、いかがでしょう。

(林委員)

この抽出というのはどんなイメージなのでしょう。各高校で何通ずつとか、そういうのですか。

(事務局)

イメージで申し上げますと、東京都は学校数の 20 パーセントの学校の校数で、学校まるごとという形をとっていると聞いております。イメージということでございますけれども。

委員長（田中委員）

そこで出てきた場合にはどうされるんですか。

(事務局)

あってはならないことですが。

(松本委員)

子どもたちは人生の中で初めてチャレンジする場面だと思うんですよ。そういうことを考えると、やっぱり、先ほど「証明」という言葉はどうしようということからずっと思うのですが、そのぐらいの意識を持って採点していただかないと事実子どもたちの人生を左右することだと思うんですよ、そのくらいもう本当にミスは絶対いけないんだという強い意志のもとに採点していただけるような方向性を示さないといけないのではないかなと思いました。具体的にどういうふうにとというのはちょっとまだですが、全員にすぐ答案を返すという話を前回提案

させていただいたのですけれども、そういうことも含めてできる限りのことをしてほしいなど。

#### (遊部専務理事)

誤りがなかったことを証明するので、採点の誤りという部分で、先ほど土佐委員の方からお話があったように、林委員もおっしゃられましたが、教科が違うのに文字の間違え、脱字はダメだとして、文字のミスですね、今、子ども達は、ICT教育で文字を書かない授業が主流になりつつあって、電子手帳とかタッチパネル、そういうものを使った中で、先ほど先生おっしゃられた全体のバランスで多かたらマルになって、少なかったらバツになる。そうなる通して試験を受けている子ども達が、あっちの学校は良くて、こっちの学校は駄目だと、おそらく子どもや保護者の中で飛び交うと思うのですね。個人的な意見になるかもしれないのですけれども、そういった時に、答案用紙一つの一教科に対して文字の欠落が3つ以上あった場合はバツにするとか、そういう取組みもありなのかなと。記述問題は一つの教科でいくつかあるかと思うのですね。その中で全体の2つ以上はダメですよ、とやった方が学校さんも、この証明の部分では誤りがなかったと少しは言いきれるところも出てくるのではないかとふと思ったんですが、どうでしょう。

#### (佐藤委員)

記述式はいろんな形で残っていくと思うのですけれども、その誤字の部分をどういうふうにするかというのはまた大きな問題、また、そこを見るか、どの程度見るかというのはこれから作問にも関わる重要な部分かなと、英語のスペルとかはもちろんダメだと思いますけれども、最初の方で林委員が、2段階で記述式の部分を見て、2点刻みで採点をすることはとても困難だと言われていたので、そのところももう少しおおまかにやっていくことも大事かなと。その中に誤字の部分も出てくると思いますのでね。あと、検証のところで、その他の部分もそうですが、まず証明云々ということで表現がいかがかということがありましたが、29年度にとにかく誤りゼロにするということが前提にあると思うんですけれども、もう一つはやはり何年か経っても誤りが出ないといえますか、また何年か経った後に出てしまうというような改正の方向では駄目だと思いますので、それにも見合ったような検証が具体的に出なくて申し訳ないのですが、年数を経ても耐えられるようなという視点もぜひ持っていかないといけないのではないかなと思います。

(林委員)

実は、皆さんご存知かもしれませんが、大学入試というのは数年前ぐらい、結構入試の作問ミスというのが起きまして、かなり世間をにぎわした。正直なところ、本学も2年前にありました。実はこの4月などそういう報道がほとんどないということを知り、あまりそういうことに関心がおありにならないとわからないかもしれませんが、私たちからすると、「あ、今年ないな」という感じなのです。それはやはりそういうことが起きて、実は先ほど管理職の方の立場、役割をお聞きしたのも、そのときに私も大学ではかなり作問とか採点に関する委員システムとか、誰が最終責任を取るか、実は私、結構最終責任取らされるので、もし起きたら、多分この場にいらなくなるかもしれない。そのぐらい今の大学、そういうことを経て、今年のようにそういう問題が起きなくなっているということは事実ありますので、おそらくこういうことがこれだけ可視化されてきて、さらにもっと可視化していけば、いま佐藤委員がおっしゃったような、要するに一回だけなくなったとかではなくなるようなシステムになるだろうし、そうすべきではないかと。ちょっと別件ですけども。

委員長（田中委員）

ありがとうございました。その他いかがでしょうか。

証明という言葉に私が引っかかったのは、どういう形、内容で証明するのかという方法論がちょっとはつきりしなかったものですから、意志の問題よりもむしろ方法がはつきりしないと先ほどおっしゃったような継続して年数を経ても続くような検証体制はどうなるかなど。大学は大変厳しく責任を問われますので、新聞にも載りますし、私も一度、他の方のミスを責任者として大変厳しく指摘されたことがございます。

(林委員)

ですので、やる前が大変ですね。試験前の方が。この抽出、再点検というの、正直な話、どのタイミングでどのくらいできるのかということですね。こう言ったらあれですけど、我々の感覚で言うと、合否発表する前であれば、極論、どんなにミスがあってもそれがちゃんと正せばいいじゃないか、入試という性質上、合否発表した後で、これが間違いでしたとなるのが一番問題なのかなど。

委員長（田中委員）

そういう点では、県教委でやる以前に各学校で任意抽出でもいいですので、やっていただくと。合否の最終チェックはもちろんですけども、任意抽出で、ランダムサンプリングでもかなりの確率でわかりますので、番号5番おきに点検す

るとかですね、そういうようなことでもやってみていただくということが一つ必要なと思います。

委員長（田中委員）

ありがとうございました。その他、ご意見が出なければというふうに思いますけれども、この中間まとめを今日一度ご審議いただきましたけれども、もう一度読んでいただいて、今度5月9日にまた委員会ございますので、それまでにご意見あれば、どこをどのように修正したらよいかというふうなところまでご意見いただいた方がまとめやすいと思いますので、お読みいただければと思います。

最後、今後の進め方ですけれども、次回ですね、この資料を基にしてさらに議論を深めていき、最終的な取りまとめの作業に入っていくことになりますので、もう一度協議する時間、お忙しいところ大変恐縮ですが、お集まりいただくことがあるかもしれません。その場合はまた日程調整させていただくということになります。よろしく願いいたします。

それではまだ時間がちょっとありますけれども、大変熱心なご協議ありがとうございました。事務局の方に司会を戻します。

（事務局）

はい、熱心なご協議ありがとうございました。先ほど委員長からもございましたけれども、次回の日程でございますが、5月9日、連休明けになります。月曜日10時から県庁、この建物の5階になりますけれども、第5会議室において開催したいと考えております。お忙しいところ恐縮ですけれども、よろしく願いいたします。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございました。